

歴代誌第一 10 - 13 章 「忠誠を誓う者たち」

1 A サウルの反逆 10

2 A ダビデを王とする神の御旨 11 - 12

1 B ダビデを支える勇士たち 11

2 B ダビデのところに来る者たち 12

3 A 神の箱の運搬 13

本文

歴代誌第一 10 章を開いてください。私たちは前回、歴代誌の背景を学びました。これは、バビロンから帰還した民が、神から与えられた幻を新たに受け取るために、ダビデ王朝の歴史を俯瞰している書物であることを学びました。しかしもはや、イスラエルに王はいません。異邦人の国の中で自治が認められているだけです。そこで彼らは礼拝の中において、王を求めました。人間の王はいないけれども、神を王として、そして後に来るダビデの子メシヤを待ち望んで礼拝を持つようとしています。私たち教会も同じです。まだ目に見える形でキリストが王となる神の国を見ていません。けれども、キリストが頭となっておられる体となっています。この方を礼拝において王と仰ぎ、確かに神の国が臨在していることを知ります。

そこで、歴代誌は神への礼拝を奉仕するレビ人の働きを詳細に描いています。前回学んだ系図では、ユダ族の系図が多いと同時に、レビ人の系図も長い一章が割かれていたのを読みました。

1 A サウルの反逆 10

10:1 ペリシテ人はイスラエルと戦った。そのときイスラエル人は、ペリシテ人の前から逃げ、ギルボア山で刺し殺されて倒れた。

話はサウルの戦死から始まります。

10:2 ペリシテ人はサウルとその息子たちに追い迫って、サウルの息子ヨナタン、アビナダブ、マルキ・シュアを打ち殺した。10:3 攻撃はサウルに集中し、射手たちが彼をねらい撃ちにしたので、彼は射手たちのために傷を負った。10:4 サウルは、道具持ちに言った。「おまえの剣を抜いて、それで私を刺し殺してくれ。あの割礼を受けていない子どもがやって来て、私をなぶり者にするといけないから。」しかし、道具持ちは、非常に恐れて、とてもその気になれなかった。そこで、サウルは剣を取り、その上にうつぶせに倒れた。10:5 道具持ちも、サウルの死んだのを見届けると、剣の上にうつぶせに倒れて死んだ。10:6 こうしてサウルは死に、彼の三人の息子も、彼の全家も、共に死んだ。10:7 谷にいたイスラエル人はみな、彼らが逃げ、サウルとその息子たちが死

んだのを見て、彼らの町々を捨てて逃げた。それで、ペリシテ人がやって来て、そこに住んだ。10:8 翌日、ペリシテ人が、その殺した者たちからはぎ取ろうとしてやって来たとき、サウルとその息子たちがギルボア山で倒れているのを見つけた。10:9 彼らは、彼の衣服をはぎ取り、彼の首と彼の武具を取った。そしてペリシテ人の地にあまねく人を送って、彼らの偶像と民とに告げ知らせた。10:10 彼らはサウルの武具を彼らの神々の宮に奉納し、彼の首をダゴンの宮にさらした。10:11 全ヤベシュ・ギルアデが、ペリシテ人のサウルに対するしうちをことごとく聞いたとき、10:12 勇士たちはみな、立ち上がり、サウルのなきがらとその息子たちのなきがらとを取り上げ、これをヤベシュに運んで、彼らの骨をヤベシュにある榎の木の下に葬り、七日間、断食した。

サウルとその息子三人は死にました。そしてペリシテ人がはぎ取りました。けれども、ヤベシュ・ギルアデの人々がサウルの遺体を、命をかけて盗み出し、彼らの骨を丁重に葬りました。この話はサムエル記第一の最後にあります。そして歴代誌の著者は、次のコメントを入れて、サウルの生涯の霊的意義を示しています。

10:13 このように、サウルは主に逆らったみずからの不信の罪のために死んだ。主のことばを守らず、そのうえ、霊媒によって伺いを立て、10:14 主に尋ねなかった。それで、主は彼を殺し、王位をエッサイの子ダビデに回された。

サウルが死んだのは主の御心であること、そして王位はダビデに回すことが主の御心でした。そしてサウルを主が殺されたのは、彼が主のみことばを守らなかったこと。さらに、霊媒に伺いを立てたのが理由でした。サウルの生涯で、アマレク人を聖絶せよという命令を貫徹せずに、王また家畜を生け捕りにしたことがありました。そしてペリシテ人との戦いで、霊媒に頼ったことがありました。

2 A ダビデを王とする神の御旨 11 – 12

それで明確に、ダビデが王であることが御心であることを述べた後で、その御心をつかみ取る者たちがダビデのところに来たことを 11 章と 12 章で著者は述べています。

1 B ダビデを支える勇士たち 11

11:1 全イスラエルは、ヘブロンのだビデのもとに集まって来て言った。「ご覽のとおり、私たちはあなたの骨肉です。11:2 これまで、サウルが王であった時でさえ、イスラエルを動かしていたのは、あなたでした。しかもあなたの神、主は、あなたに言われました。『あなたがわたしの民イスラエルを牧し、あなたがわたしの民イスラエルの君主となる。』」11:3 イスラエルの全長老がヘブロンのだビデのもとに来たとき、ダビデは、ヘブロンで主の前に彼らと契約を結び、彼らは、サムエルによる主のことばのとおり、ダビデに油をそそいでイスラエルの王とした。

ダビデはサウルから逃げ、サウルが死んだ後にヘブロンでユダ族によって王位を受けました。けれども、サウル家の息子にイスラエルは付き、内乱が続きました。その息子が死んで、イスラエルの者たちもダビデを王として立てたのです。彼らの言葉で大事なものは、「サウルが王であった時でさえ、イスラエルを動かしていたのは、あなたで

した。」という言葉です。人間の世界の中で、神の主権によって、その御霊によってダビデが王になるように神が仕向けておられました。そのことを、全イスラエルは認めたのです。私たちは基本的に、このような流れの中にいます。つまり世に住んでいます。空中に権威を持つ支配者の下に生きています。しかし神が主権をもって、御霊によって働いておられます。私たちがいかに、その流れを見分け、その流れに自分の身をゆだねるのが問われています。

そしてサムエルのことばどおりに、とありますが、サムエルは預言者でダビデが王であることを油注ぎで表したのですから、それは神の御心なのです。そのとおりに、彼らもダビデを王として油注ぎました。

ここで考えなければいけないのは、神の任命と人の確認です。パウロは、ガラテヤ書の冒頭で「使徒となったパウロ・・・私が使徒となったのは、人間から出たことでなく、また人間の手を通したことでなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神によったのです・・・（ガラテヤ 1:1）」と言いました。人から出た使徒ではない、イエス・キリストの父なる神から使徒に任命されたのだ、ということです。任命は神が行われます。その人に神が働かれていること、確かにこの人に神の御手が置かれていることを知っている人々が、神の任命を追認するのです。ちょうどサムエルによって少年ダビデが油注がれて、その神の油注ぎをイスラエルが追認したのと同じです。

11:4 ダビデと全イスラエルがエルサレム・・・それはエブスのことで、そこには、この地の住民エブス人がいた。・・・に行ったとき、11:5 エブスの住民はダビデに言った。「あなたはここに来ることはできない。」しかし、ダビデはシオンの要害を攻め取った。これがダビデの町である。11:6 そのとき、ダビデは言った。「だれでも真先にエブス人を打つ者をかしらとし、つかさとしよう。」ツェルヤの子ヨアブが真先に上って行ったので、彼がかしらとなった。11:7 こうしてダビデはこの要害を住まいとした。このため、これはダビデの町と呼ばれた。11:8 彼は、ミロから周辺に至るまで、町の周囲を建て上げ、町の他の部分はヨアブが再建した。11:9 ダビデはますます大いなる者となり、万軍の主が彼とともにおられた。

イスラエルがダビデを王にした後に、ダビデはエブス人の住むエルサレムを奪取しました。今の、神殿の丘の南にある細長い丘がダビデの町です。「ミロ」というのは、擁壁の一つです。そして、最後のコメントに、ダビデが大いなる者となったのだが、それは「万軍の主が彼とともにおられた」からである、とあります。万軍の主、すなわち天における万とある軍勢、御使いたちのことです。その主である方がこれらの戦いに勝利を与えておられます。ですから、ダビデの勝利は彼の能力ではなく、神の力なのだということです。同じように、ダビデのつく勇士たちも神の力によって戦ったのだ、ということでもあります。

11:10 ダビデの勇士のかしらたちは次のとおりである。彼らは、彼とともに全イスラエルに対する彼の王権を強固にし、イスラエルについての主のことばどおりに、彼を王とした人々である。

ここから 12 章まで、ダビデが全イスラエルの王となるためにその背後で活躍した兵士たちの話が出てきます。実に彼らの存在によって、神の国がダビデによって広がったとって過言ではありません。もう一度言いますが、これは万軍の主が共におられるからであり、単に彼らの有能な武勇ではないということです。

11:11 ダビデの勇士たちの名簿は次のとおりである。補佐官のかしら、ハクモニの子ヤショブアム。彼は槍をふるって一度に三百人を刺し殺した。11:12 彼の次は、アホア八人ドドの子エルアザル。彼は三勇士のひとりであった。11:13 彼はダビデとともにパス・ダミムにいた。ペリシテ人はそこに集まって来て戦いをいどんだ。そこには大麦の密生した一つの畑があり、民はペリシテ人の前から逃げたが、11:14 彼らはその畑の真中に踏みとどまって、これを救い、ペリシテ人を打ち殺した。こうして、主は大勝利を収められた。

数ある勇士のうち三勇士は秀でていました。ペリシテ人に打ち勝ったのは、「主が大勝利を収めたから」とあります。

11:15 三十人のうちのこの三人は、岩場にあるアドラムのほら穴にいるダビデのところに下って来た。ペリシテ人の陣営は、レファイムの谷に張られていた。11:16 そのとき、ダビデは要害におり、ペリシテ人の守備隊長はそのとき、ベツレヘムにいた。11:17 ダビデはしきりに望んで言った。「だれか、ベツレヘムの門にある井戸の水を飲ませてくれたらなあ。」11:18 すると、この三人は、ペリシテ人の陣営を突き抜けて、ベツレヘムの門にある井戸から水を汲み、それを携えてダビデのところに持って来た。ダビデはそれを飲もうとはせず、それを注いで主にささげて、11:19 言った。「そんなことをするなど、わが神の御前に、絶対にできません。これらいのちをかけた人たちの血が、私に飲めましょうか。彼らはいのちをかけてこれを運んで来たのです。」彼は、それを飲もうとはしなかった。三勇士は、このようなことをしたのである。

ここで三勇士が、もっとも英雄化されている理由が書かれています。それはダビデへの忠誠です。彼がベツレヘムの水が飲みたいと言ったために、彼らは命をかけてペリシテ人の陣営の突入し、水を取ってきました。そしてダビデはその水を飲まずに主にささげるといふ、主がこの忠誠心の中に働いておられることを彼は身に沁みて分かりました。私たちが忠誠心を持つこと、そして誰をもダビデのように、そこに現れた栄光を自分のものにしないこと、これが神の働きが力強く行われる理由です。

11:20 ヨアブの兄弟アブシャイ、彼は三人のかしらであった。彼は槍をふるって三百人に向かい、これを刺し殺したが、あの三人の中には、その名がなかった。11:21 彼は三人の中で最も誉れが高かった。そこで彼らの長になった。しかし、あの三人には及ばなかった。11:22 エホヤダの子ベナヤは、カブツエルの出で、多くのてがらを立てた力ある人であった。彼は、モアブのふたりの英雄を打ち殺した。また、ある雪の日に、ほら穴の中に降りて行って雄獅子を打ち殺した。11:23 彼はまた、あのエジプト人・・・背の高い男で、五キュビトあった。・・・を打ち殺した。このエジプト人は、手に機織りの巻き棒に似た槍を持っていた。彼は杖を持ってその男のところに下って行き、エジプト人の手から槍をもぎ取って、その槍で彼を殺した。11:24 エホヤダの子ベナヤは、これ

らのことをして、三勇士とともに名をあげた。11:25 彼は、実に、あの三十人の中で最も誉れが高かったが、あの三人には及ばなかった。ダビデは彼を自分の護衛長にした。

ダビデの参謀的位置につく三人の紹介です。強調されているのは、三人の勇士には及ばない、ということです。やはり戦う能力以上に忠誠心なのだ、ということです。

そして 26 節から勇士たちの名が連なっています。これは読み飛ばします。

2 B ダビデのところに来る者たち 1 2

次に、ダビデが逃亡している時に、そのような惨めで弱いダビデに、次々とやってくる兵士たちの姿を見ます。

12:1 ダビデがキシユの子サウルのゆえに、まだツイケラグに引きこもっていたとき、ツイケラグの彼のもとに来た人々は次のとおりである。彼らは勇士たちの中で、戦いの加勢をした人々であり、12:2 弓を持った者、石投げ、弓矢に、右手も左手も使う者で、サウルの同族、ベニヤミンの出であった。12:3 かしらはアヒエゼル、次はヨアシユ。彼らはギブア人シエマアの子。エジエル、ペレテ。彼らはアズマベテの子。次にベラカとアサトテ人エフー。12:4 ギブオン人イシュマヤ、彼は三十人の中の勇士で、三十人の長であった。次に、エレミヤ、ヤハジエル、ヨハナン、ゲデラ人エホザバデ、12:5 エルウザイ、エリモテ、ベアルヤ、シエマルヤ、ハリフ人シェファテヤ、12:6 エルカナ、イシヤ、アザルエル、ヨエゼル、ヤシヨブアム。これらはコラ人である。12:7 ヨエラ、ゼバデヤ。これらはゲドルから出たエロハムの子らである。

ダビデがツイケラグにいた時のことです。ダビデがサウルから追われていたけれども、二度、神の守りによってサウルを殺すことのできるような機会がありました。一つはエン・ゲディにおいて、隠れていた洞穴にサウルが入ってきて彼の衣のすそを一部切り取ったというものです。もう一つは、ジフの荒野というところにサウルが追って来た時に、サウルと家来たちが寝ている時、ダビデはサウルの横にある槍と水差しを取ってきました。

このように主が弱まっている、恐れているダビデを一步一步助けてくださっていたのですが、このストレス生活に耐えられないダビデは、思いっきりペリシテ人の領地に住んだのです。敵地にいればサウルは追ってきません。けれども、自分が亡命者であると偽らなければいけなく、彼の妥協と打算の生活が始まりました。それにも関わらず、主はダビデに、イスラエルの王となるための備えを与えてくださっています。間もなく、ペリシテ人との戦いでサウルは殺されます。ダビデが王となるために、主がいろいろなところからダビデにつく兵士たちを連れて来てくださいました。

初めに書き記されているのは、なんとベニヤミン人たちです。サウルの同族の者たちであります。もっともサウルに忠誠を誓わなければいけない者たちが、勇気を出してダビデのところにやってきました。彼らは両手利きでした。士師記には、ベニヤミンの精鋭部隊は左利きであることが書かれていますが（20:16）、彼らはもっと優

れています。そして 4 節を見ると、11 章にあった三十人の勇士の長は、このベニヤミン人から選出されています。彼らの姿は、もっとも世的に思われる、もっとも世の中にどっぷり浸かっている人が敢えてキリストの道を選んだ人と同じであると言えます。例えば、クリスチアンの家庭ではなく、仏教の僧侶の家庭で育ったであるとか、キリストに従えば間違いなく迫害がある人々です。けれども、キリストへの忠誠はこうした世の力をも凌駕します。

12:8 また、ガド人から離れて、荒野の要害をさしてダビデのもとに来た人々は、勇士であって戦いのために従軍している人であり、大盾と槍の備えのある者であった。彼らの顔は獅子の顔で、早く走ることは、山のかもしかのようなものであった。12:9 そのかしらはエゼル。第二はオバデヤ。第三はエリアブ。12:10 第四はミシュマナ。第五はエレミヤ。12:11 第六はアタイ。第七はエリエル。12:12 第八はヨハナン。第九はエルザバデ。12:13 第十はエレミヤ。第十一はマクバナイ。12:14 これらはガド族から出た軍のかしらたちで、その最も小さい者もひとりが百人に匹敵し、最も大いなる者は千人に匹敵した。12:15 この人々は、第一の月、すなわちヨルダン川がどこの岸もいっばいにあふれるとき、これを渡った者たちである。彼らは谷にいた人々を全部、東に西に追い払った。

ガド族から来た者たちです。彼らはヨルダン川の東に住んでいます。そして、彼らがダビデのところに来たのは、彼が「荒野の要害」にいた時であるとあります。ユダの荒野の要害、もしかしたらマサダのことでしょうか？そして彼らの勇者ぶりを描いています。大盾と槍を有している、獅子のような顔、かもしかのような足の早さ、そして、ひとりが百人、千人に匹敵したことなど、どれもこれもすばらしいです。そして彼らは、谷にいた人々、すなわちかつて士師の時代に谷に住んでいたので戦うことができなかったカナン人の末裔でありましょう、その人々を追い払うことができた、という勇者たちです。

けれども、もっと優れているのは何よりも、ヨルダン川を渡ったということです。第一の月は三月終わりから四月にかけての月で、雪解け水でもっとも水量が多くなる時です。この時に彼らはヨルダン川を渡河しました。ここから分かることは、彼らは遠くにいても、それでもダビデに付いてくる、ということです。ヨルダン川という大きな隔てがあっても、それを乗り越えてやってきました。

しばしば、「聖書の知識は身近ではない。分かりにくい。」という声を聞きます。そこにある言葉の裏には、「私に合わせた食べ物をくれ」と言っている声が聞こえます。自分が選り好みしているのではないか？分かりにくいと思われる、これら聖書箇所を丹念に解きほぐしてみようという努力はないのか？使徒ペテロは、「私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。（ペテロの手紙第二 3:18）」と言いました。キリストの知識と自分との間に水をたたえているヨルダン川のような存在があるなら、それを渡ってみるガッツが必要です。キリストを知るための、飽くなき情熱と追及が必要です。

12:16 さらに、ベニヤミン族とユダ族からも、要害のダビデのもとに来た者があった。12:17 そこで、ダビデは彼

らの前に出て行き、彼らに答えて言った。「もし、あなたがたが穏やかな心で、私を助けるために私のもとに来たのなら、私の心はあなたがたと一つだ。もし、私の手に暴虐がないのに、私を欺いて、私の敵に渡すためなら、私たちの父祖の神が見て、おさばきくださるように。」12:18 そのとき、御霊が補佐官の長アマサイを捕えた。「ダビデよ。私たちはあなたの味方。エッサイの子よ。私たちはあなたとともにいる。平安があるように。あなたに平安があるように。あなたを助ける者に平安があるように。まことにあなたの神はあなたを助ける。」そこで、ダビデは彼らを受け入れ、隊のかしらとした。

ダビデが荒野の要害にいたときに、ガド族の他にベニヤミン族とユダ族もやってきました。ダビデが敵か味方が警戒しているところ、アマサイを御霊が捕えました。そして、平安があるようにという預言の言葉、慰めの言葉をかけます。分かるでしょうか、このように勇士たちが集まっているのは、ダビデを王としようとする主の御心が御霊によって動いているからです。私たちが果たして、御霊が導かれているところに付いて行っているのでしょうか？主が語られているところに動いているのでしょうか？神の御心をはっきりと知ること、その霊的識別力を、自分を捨てて、キリストに自分を従わせることによって養うこと。そうすれば、御霊が働いている姿を自分も眺めることができます。

12:19 ダビデがペリシテ人とともに、サウルとの戦いに出たとき、マナセからも、何人かの者がダビデをたよって来た。しかし、彼らはペリシテ人を助けなかった。ペリシテ人の領主たちが、「彼はわれわれの首を持って、主君サウルのもとに下って行くのだ。」と言い、わざわざ彼を送り返したからである。12:20 彼がツイケラグに行ったとき、マナセからアデナフ、エホザバデ、エディアエル、ミカエル、エホザバデ、エリフ、ツイルタイが彼をたよって来た。彼らは、マナセに属する千人隊のかしらであった。12:21 彼らはダビデを助けて、あの略奪隊に当たった。みな勇士であり、将軍であった。

話はツイケラグに戻ります。ベニヤミン族がやってきた他にマナセ族もやってきました。そして、ダビデがペリシテ人のアキシユに付いて行って、とサウルとの戦いに同行したけれども、他のペリシテ人の領主がダビデを疑ったのでアキシユはダビデをツイケラグに戻しました。そして戻ったところ、アマレク人に妻子、財産すべて奪い取られていました。そしてエジプトに向かって急いでいき、そのすべてのものを奪い返すことができました。この時にマナセが加わっていました。

そして、まとめが書いてあります。12:22 日に日に、人々がダビデを助けるため彼のもとに来て、ついに神の陣営のような大陣営となった。

これが御霊の働きです。世の支配に抗う御霊の働きに従順になっている者たちの姿です。それは、神の陣営のようだとあります。神の陣営、すなわち無数の御使いが戦うのと同じように彼らも戦う態勢ができていた、ということです。私たちはどちらかに付きます。御霊に導かれるのか、それとも世を愛して、肉の望むままを行なうのか。中間地点にいることはできません。中庸になることはできません。

12:23 主のことばのとおり、サウルの支配をダビデに回そうと、ヘブロンにいるダビデのもとに来た、武装した者のかしらの数は次のとおりである。

これから各部族の軍隊の人数を列挙しています。ここで著者が強調しているのは、「主のことばのとおり」であります。サウルの支配という強い圧力がかかっても、主のことばのとおりダビデに王位を与えようとするのかどうか？ 私たちが世からの強い圧力を受けても、主のことばがあるという理由だけで、それに抗する心備えができてかどうか、であります。

12:24 ユダ族で、大盾と槍を手にし武装した者六千八百人。12:25 シメオン族から軍務につく勇士七千百人。12:26 レビ族から四千六百人。12:27 エホヤダはアロンのつかさで、彼とともにいた者は三千七百人。12:28 ツアドクは若い勇士で、その一族には二十二人のつかさがいた。

レビ人とアロン系の祭司も武装してダビデのところに行ってきました。

12:29 サウルの同胞、ベニヤミン族から三千人。これまで、彼らの大多数は、サウルの家の任務についていた。12:30 エフライム族から二万八百人。勇士で、その一族に名のある人々であった。12:31 マナセの半部族から、ダビデを王にしようとしてやって来た名の示された者一万八千人。12:32 イッサカル族から、時を悟り、イスラエルが何をなすべきかを知っている彼らのかしら二百人。彼らの同胞はみな、彼らの命令に従った。12:33 ゼブルンから、従軍する者で、完全に武装し、戦いの備えをした者五万人。彼らは心を一つにして集まった。12:34 ナフタリから、つかさ一千人。彼らのもとに、大盾と槍を持つ者三万七千人。12:35 ダン人から、戦いの備えをした者二万八千六百人。12:36 アシエルから、従軍する者で、戦いの備えをした者四万人。12:37 ヨルダン川の向こう側、ルベン人、ガド人、マナセの半部族から、戦いのために完全軍装をした者十二万人。

確かに、神の陣営のように、ぞくぞくと全イスラエルから集まっています。ここで繰り返されているのは、「完全に武装している」という言葉です。これは隊列を崩さない、という意味合いがあります。戦っている時に、敵から殺されるという恐れから敵前逃亡すれば、その隊列が崩れて全員総倒れになります。ですから、どんなことがあってもその隊列を崩さないで一致を保つという意味合いがあります。今朝は主に心を一つにする、ということ学びましたが、それは互いにしっかりと結びつくということと同時に行われます。キリストにつながり、そしてキリストに会って互いにつながります。

12:38 誠実な心で、並び集まったこれらの戦士たちは、ヘブロンに来て、ダビデを全イスラエルの王にした。イスラエルの残りの者たちもまた、心を一つにしてダビデを王にした。12:39 彼らはそこに、ダビデとともに三日間とどまり、飲み食いました。彼らの兄弟たちが彼らのために用意したからである。12:40 彼らに近い者たちも、イッ

サカル、ゼブルン、ナフタリに至るまで、ろば、らくだ、騾馬、牛に載せて食べ物を運んで来た。小麦粉の菓子、干しいちじく、干しぶどう、ぶどう酒、油、牛、羊などがたくさん運ばれた。イスラエルに喜びがあったからである。

すばらしいですね、これら心をつににした者たちが、全き心で並び集まったとあります。「誠実な心」というのは、「全き心」と訳すことができます。先ほどから、心をつ、並び集まる、隊列を崩さないなど、忠誠によって強くかたまった軍隊の姿を見ることができますね。そこで、ダビデを王として立て、そしてお祝いしたのです。喜びがあったからです。私たちにも、キリストにあって思いが一つになっている時に、主が成し遂げてくださった一つのことを共に喜び祝うことができます。

3 A 神の箱の運搬 13

13:1 ここに、ダビデは千人隊の長、百人隊の長たち、すべての隊長と合議し、13:2 イスラエルの全集団に向かって、言った。「もしも、このことが、あなたがたによく、私たちの神、主の御旨から出たことなら、イスラエル全土に残っている私たちの同胞にいっせいに使者を送ろう。彼らのうちには、放牧地のある町々の祭司やレビ人もいる。彼らを私たちのもとに集めよう。13:3 私たちの神の箱を私たちのもとに持ち帰ろう。私たちは、サウルの時代には、これを顧みなかったから。」13:4 すると全集団は、そうしようと言った。すべての民がそのことを正しいと見たからである。

軍に属する者たちが初めに行ったのは、そうです、主への礼拝を回復することでした。神の箱が、かつてペリシテ人との戦いで奪い取られ、ベテ・シメシュに戻ってきたはいいものの、贖いの蓋を開いてしまったので大勢が死んでしまいました。そして、レビ人の町、キルヤテ・エアリムに箱を安置していたのです。それをエルサレムに持っていき、とダビデは持ちかけました。そして軍に属する者たちが合議し、そして全イスラエルがそれは良いことだ、正しいことだと認めました。すばらしいです、本当にすばらしいです！主を礼拝するところに、神は豊かな祝福を与えてくださるし、礼拝において民が一致しているのです。

そしてその礼拝のために、全国に点在しているレビ人と祭司を集めようと言っています。前回学んだとおり、祭司やレビ人は、主に仕え、主の祝福と恵みを他者に分かち合うため任命された人々です。その奉仕のための賜物も与えられた人々です。私たちが礼拝するとき、神が恵みによって与えておられる賜物を用いて、主に仕えていく必要があります。「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン。（ペテロの手紙第一 4:10-11）」

13:5 そこで、ダビデは、神の箱をキルヤテ・エアリムから運ぶため、エジプトのシホルからレボ・ハマテに至るまでの全イスラエルを召集した。

約束の地とされた、エジプトの川辺りから、ユーフラテス川の上流地域であるレボ・ハマテに至るまでのイスラエル人を召集しました。すべてのイスラエル人が参加すべきイベントであり、非常に重要なものだからです。主イエス・キリストが死者の中からよみがえり、天に昇られ、神の右の座に着かれたという出来事も、古今東西、すべての教会が共有し、共に主をほめたたえるべきことであります。私たちがイスラエル旅行に行った時に、さまざまな国からのクリスチャンに出会います。そこでいろいろな言語で讃美を歌います。私たちは、ただ主にあって私たちがつながっているのだ、ということです。キリストが右の座に着いておられるということにつながっているのだ、ということです。

13:6 ダビデと全イスラエルは、バアラ、すなわち、ユダに属するキルヤテ・エアリムに上って行き、そこから、「ケルビムに座しておられる主。」と呼ばれていた神の箱を運び上ろうとした。13:7 そこで彼らはアビナダブの家から神の箱を新しい車に載せた。ウザとアフヨがその車を御していた。13:8 ダビデと全イスラエルは、歌を歌い、立琴、十弦の琴、タンバリン、シンバル、ラッパを鳴らして、神の前で力の限り喜び踊った。13:9 こうして彼らがキドンの打ち場まで来たとき、ウザは手を伸ばして、箱を押えた。牛がそれをひっくり返しそうになったからである。13:10 すると、主の怒りがウザに向かって燃え上がり、彼を打った。彼が手を箱に伸べたからである。彼はその場で神の前に死んだ。13:11 ダビデの心は激した。ウザによる割りこみに主が怒りを発せられたからである。それでその場所はペレツ・ウザと呼ばれた。今日もそうである。13:12 その日ダビデは神を恐れて言った。「私はどうして、私のところに神の箱をお運びできますでしょうか。」13:13 そこで、ダビデは箱を彼のところダビデの町には移さず、ガテ人オベデ・エドムの家に戻した。13:14 このようにして、神の箱はオベデ・エドムの家族とともに、彼の家に三か月間とどまった。主はオベデ・エドムの家と、彼に属するすべてのものを祝福された。

このウザの事件はサムエル記第二にも記されていますね。歴代誌第一では、15章にその原因をはっきりとダビデが語っています。レビ人が神の箱をかつがなかったからいけないのだ、「この方を定めのとおり求めなかったからだ（15:13）」と言っています。主に対して仕えるその心はもちろん大切です。けれども、私たちは主に仕えることだけでなく、その仕える方法も主から受けなければいけません。そうでなければ、主の栄光に自分が割り込むことになりかねません。

今回は、エルサレムにおけるダビデの王位が確立するところを読みます。サムエル記第二では読むことができなかった、レビ人たちの讃美も読むことができます。